第８４回全国都市問題会議報告書

令和４年 10 月 24 日

貝塚市議会議長　　籔内　留治　殿

自由市民　食野　雅由
田畑　庄司
（議長）　籔内　留治

[開催概要]

主 催　　全国市長会、(公財)後藤・安田記念東京都市研究所
(公財)日本都市センター　長崎市
協 賛　　(公財)全国市長会館
開催期日　第１日　10 月 13 日（木）
第２日　10 月 14 日（金）
会 場　　出島メッセ長崎
テーマ　　個性を活かして『選ばれる』まちづくり～何度も訪れたい場所になるために

第１日　9:30　開会式
9:50　基調講演 ㈱ジャパネットＨＤ代表取締役社長兼ＣＥＯ　髙田旭人 氏
11:00 主報告 長崎県長崎市長　田 上 富 久 氏
12:10 （昼　食）
13:30 一般報告 島根県立大学地域政策学部准教授　田 中 輝 美 氏
14:30 （休　憩）
14:50 一般報告 山形県山形市長　佐 藤 孝 弘 氏
15:50 一般報告 （一社）地域力創造デザインセンター代表理事 髙尾忠志氏
17:00 （終　了）

第２日　9:30　パネルディスカッション
（コーディネーター）
東京都立大学法学部教授　大 杉　覚 氏
（パネリスト）
ゆとり研究所所長　野 口 智 子 氏
山梨大学生命環境学部教授　田 中　敦 氏
ＮＰＯ法人長崎コンプラドール理事長　桐 野 耕 一 氏
岐阜県飛騨市長　都 竹 淳 也 氏
兵庫県伊丹市長　藤 原 保 幸 氏
11:50 閉会式

[１０月１３日]

開会式（９：３０）

９時３０分より開会式が行われました。先ず、全国市長会会長の立谷秀清福島県相馬市長の開会挨拶があり、その後、開催市である田上富久長崎市長の歓迎の挨拶、そして、来賓として、長崎県知事（代理）の祝辞がありました。

基調講演（９：５０）

開会式終了後、㈱ジャパネットホールディングス代表取締役社長兼ＣＥＯ 髙田旭人氏の基調講演が「民間主導の地域創生の重要性」というテーマで始まりました。髙田社長は１９７９年生まれで、東京大学卒業後、証券会社勤務後、ジャパネットたかたへ入社。バイヤー部門、コールセンター部門、物流部門の責任者を経て、２０１０年にジャパネットコミュニケーションズ代表取締役社長になり、ジャパネットたかた取締役副社長を経て、２０１５年にジャパネットホールディングス代表取締役社長に就任、現在に至っている。

立谷秀清全国市長会会長挨拶

高田旭人社長の基調講演

会場の様子

その高田氏の講演内容は、自社の通販事業に加えて、スポーツ・地域創生事業を手掛け、長崎市を中心に新たな展開を計画されています。それはプロサッカークラブ「Ｖ・ファーレン長崎」の運営を通じて、２０２０年に長崎発のプロバスケットボールクラブ「長崎ヴェルカ」を立ち上げ運営し、現在は長崎駅前にスタジアム・アリーナや商業施設、ホテル等で構成するまちづくり「長崎スタジアムシティプロジェクト」を進めており２０２４年の開業を目指しています。このような講演を聞きとても大きな社会貢献をされている事に驚きました。この中で、長崎スタジアムで企画・検討している事を述べられていました。先ず、荷物持ち込みを禁止し、ロッカールームをたくさんつくり、荷物チェックを簡素化する、試合後の出庫時間に応じて、駐車時間を変える。例えば、試合直後の出庫は割高にして商業施設などの利用に繋げる。スタジアム・アリーナを活用し、賃貸面積が少なくても快適なオフィスを提供する。年間シート購入者には高速 Wi-Fi を提供する。商業施設の使用ターゲットを昼夜で変えて、稼働率を上げる。スタジアムの非稼働日の演出を工夫す

る。スタジアムのＶＩＰルームは、試合のない日はスタジアムが臨めるホテルとして活用する。美味しいビールづくりをする。試合後にスタジアムで楽しめるサッカー・バスケットの特集番組をつくり、スタジアム内で放送する。語学とスポーツを同時に学べるスクールを開設する。最後に、長崎大学大学院を誘致し、オフィスへ入居する企業との交流を促進する。これらのプランをもってこのプロジェクトを計画されています。因みに、スタジアムの収容観客数は２００００人、アリーナ６０００人、ホテル２４５室、商業施設９０店舗を計画されています。これらの発想は行政ではなかなかできないもので、民間企業中でもジャパネットたかたならではの素晴らしい計画であると感じました。しかしながら、高田社長が仰っていたのは行政の大きな協力が無いと困難なものになるので行政の前向きな取り組みを期待されていました。我々は、現在の長崎市においての取り巻く環境は、西九州新幹線の開通を契機に国や県の協力を大いに活用して素晴らしいものにしていると思いました。

主報告（１１：００）

続いて、田上長崎市長からの主報告がありました。テーマは「長崎市の魅力あるまちづくり」で、最初に長崎市の交流の歴史についての報告がありました。それによると、長崎は、約４５０年前の開港から現在まで、海を通じて、たくさんの人々を受け入れて交流することで栄え、国内外の様々な文化を取り入れながら、豊かな個性をもつ都市として発展してきた。その後、近年のめまぐるしい変化に直面し、人口減少や少子高齢化に加え、コロナウイルスの行動制限や経済の低迷、また、ポストコロナへの対応など様々な変化に対応することが求められている。このような中、ワーケーションやテレワーク移住などの働き方・住み方の多様化が出てきている。このような中で、長崎市の新しい取り組みを報告されました。

長崎市の価値とは何かということで、長崎市の価値を見つける。その一つとして２０２１年に開業した、長崎市恐竜博物館は、長崎半島で国内初のティラノザウルス科の歯の化石が発見されて新たな価値が見つかった。次に価値に気づくことで、「長崎さるく」はその代表で「さるく」とは長崎の方言で「ぶらぶら歩く」という意味で要は、まち歩きであります。長崎市内に散らばる魅力を見つけながら歩くもので、住んでいる市民が地域資源の価値に気づかないと持続可能な観光は実現しないと言う思いから、市民参加による企画やガイドにより進めてきた。この取り組みは、特別な何かをつくるのではなく、暮らしの中から身近な価値に気づくことで、まちへの愛着につながるものになっている。そして、価値を磨く取り組みとして、全国的にはほとんど例のない景観専門監制度の導入です。長崎市では、一般社団法人地域力創造デザインセンターの高尾忠志先生に着任してもらい、職員の警官に関する意識と醸成と公共デザインの指導と管理に携わって頂き、長崎駅周辺再整備事業や出島表門橋の架橋などの大型事業や市内各地の公園や道路や建物などの整備・改修を進められてきました。このような取り組みで、景観は見て美しいだけでなく、快適

であったり、その場所の個性を感じたりと、暮らす人や訪れる人にとっても大切なものになってきたそうです。最後に、新たに創造することにより価値を生み出すという視点ができてきたことです。その例として、前述の「長崎スタジアムシティプロジェクト」でありそれに加え、長崎大学（医学部）が進める熱帯医学研究である。これは、我が国唯一の熱帯医学研究所が設置され、国際的な医療・保険分野の発展に貢献してきている。又、新たに最先端の感染症研究が進むことが期待でき、国際的な貢献への寄与とともに、長崎に新たな価値をもたらしてくれる。このように長崎市では、まちの価値を見つめなおしており、その価値に気づく契機にはやはり「交流」が欠かせない。交流の中で価値を見つめなおし、その先にある「都会でもなく、田舎でもない、ちょうどいい長崎らしい暮らしやすさ」＝「長崎ライフ」がより豊かなものになることで、まちで暮らす人にも、まちを訪れる人にも魅力的なまちとなり、持続可能な地域社会の構築につながるものであると考えていると述べられていました。

田上長崎市長の主報告

田中輝美氏の一般報告

佐藤山形市長の一般報告

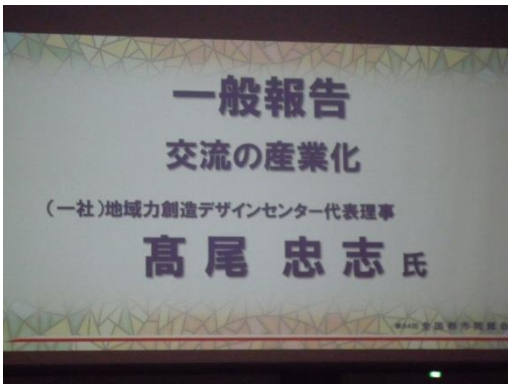
一般報告（１３：３０）

昼食後、島根県立大学地域政策学部准教授の田中輝美氏の一般報告に入りました。田中氏は、午前の講演の中身を聞いて、当初のテーマから「都市の新たな魅力と関係人口」というテーマに変更しての報告となりました。先ずここで初めて知ったのが、関係人口という言葉でした。関係人口とは、短期間の交流や観光という関わり方ではなく、長期間暮らし続けるという定住という関わり方でもない、その間にある新しい地域との関わり方である。そこで、田中氏は鳥取市用瀬町（もちがせまち）の事例を紹介されました。ここでは、体験型民泊施設「体験と民泊　もちがせ週末住人の家」に鳥取市内にある公立鳥取環境大学に通っていた学生が知人の紹介で用瀬町の住民から週末のイベント等に参加したりして週末になると「週末住人」として活動するようになった。このように、これからの日本において人口減少が進むなかで、特に過疎地においてはこのような関係人口はこれからの新しい時代の考え方であると思いました。

一般報告（１４：５０）

次に、山形県山形市長の佐藤孝弘氏の一般報告がありました。冒頭、山形市の紹介から、

選ばれるまちとなるために、「健康医療先進都市」と「文化創造都市」の２大ビジョンを基本的な考え方として施策展開をされています。「健康医療先進都市」の取り組みとして、市内には、山形市立病院済生館をはじめとする総合病院が数多く立地し、人口１人当たりの診療所数も多いまちであり、その上東北で初となる次世代型重粒子線がん治療が開始されるなど、最先端の医療が充実しています。又、歩くことをベースにした健康で暮らしやすいまちづくりを推進されています。それには、公共交通を充実させできるだけ歩くことに誘導しています。そしてもう一つが文化芸術活動を通じて持続的な発展を目指している。「文化創造都市」です。３０年以上前に市民の手づくりによる映画祭として誕生したのが、山形国際ドキュメンタリー映画祭であります。この映画祭は、ドキュメンタリー映画祭の中では世界的に確固たる地位を築きあげてきており、開催中は山形市内には、世界中から映画関係者や映画ファンが多く集まり活気にあふれるそうです。そして、文化遺産が多くあることから、令和４年９月にオープンした文化創造都市の拠点となる「やまがたクリエイティブシティセンター」を活用して地方都市における文化芸術活動を持続可能なものにすることにチャレンジされています。



高尾氏の一般報告

一般報告（１５：５０）

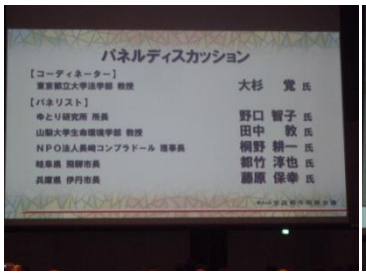
山形市長に続いて、（一社）地域力創造デザインセンター代表理事の高尾忠志氏の一般報告に移りました。高尾氏は現職の他に、九州大学特認准教授でもあり、後前の主報告に田上市長からあったように長崎市景観専門監であるので、一人で産・官・学を兼ねていると言われていました。高尾氏は、専門監に就任して約１０年でその間、公共事業のデザインの指導と管理や職員の育成など、どの部局にも属さず、市役所全般に亘る改革にノウハウを発揮して意識改革に繋げられました。報告の内容は、田上市長の長崎における報告を掘り下げたものであると感じました。特に、価値を創造するデザインマネージメントにおいては流石であると思いました。

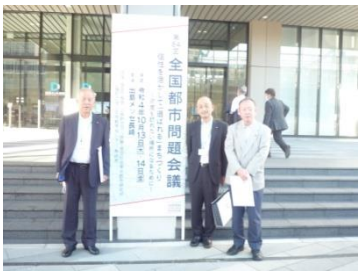
[１０月１４日]

パネルディスカッション（９：３０）

二日目は、「個性を活かして選ばれるまちづくり」をテーマにパネルディスカッションがありました。コーディネーターに東京都立大学法学部教授大杉覚氏で、はじめに選ばれるまちづくりの基本を述べられました。それは先ず幸せであること、暮らしの中での様々な体験、そして行政の幸せづくりへのサポートであると言われていました。その後、パネリストの方々からそれぞれの取り組みの報告がありました。

最初に、ゆとり研究所所長野口智子氏から「ひとが人を磨き、輝く人が人を呼ぶ」というテーマで、自身が取り組んできた長崎県雲仙市の「雲仙人(くもせんにん)プロジェクト」の試みを発表されました。野口氏は、雲仙市の地域力創造アドバイザーに３年前に就任され、地域おこしに携わってこられました。その手法がこのプロジェクトでした。まちの中で色々な人々の集まりがありそこには見えない垣根があります。その垣根を低くして取り除くことが目的達成への環境づくりであったそうです。このような中で地域の人たちと毎月ゆるーい楽しいサロンを開催し出会いでの楽しい暮らしを作り上げていっています。又、野口氏は、和歌山県紀ノ川市で「フルーツツーリズム　ぷる博」というワークショップを立ち上げ成功を収めている事も仰っておられました。





パネルディスカッション　　コーディネーターの大杉氏　　出島メッセ正面で

次に、山梨大学生命環境学部教授田中敦氏の発表が「ワーケーションの意味の拡張と変異」のテーマで行われましたが、声が小さく会場の中からも聞こえないとのクレームがありました。断片的に聞いたところ、ワーケーションを学問的に分析して深く掘り下げておられました。内容はともかく、これからワーケーションが欧米からの影響もあり、日本の働き方の選択肢になると思いました。

次に、ＮＰＯ法人長崎コンプラドール理事長桐野耕一氏からの発表がありました。テーマは「ひとは人に会いに行く」でまち歩きで見つけたまちのつくり方を述べられました。それは、「長崎さるく博」の開催で市民がガイドとなりまち歩きを観光客などに市民目線での心のこもったおもてなしをされています。そのガイドには、田上市長も自ら取り組み先

頭に立って頑張っておられます。

次に、岐阜県飛騨市長の都竹淳也氏らの発表がありました。飛騨氏は、岐阜県の最北端に位置し人口２２７００人ほどの過疎地で、高齢化率は約４０％で国の倍のスピードで人口減少が続いている。地域活動や祭りなどの担い手はもちろん、介護や医療、製造業やサービス業など地域産業の従事者の確保なども困難になってきている。このような中で頼りになるのが地域外の人である。移住はしなくても、心を寄せ、力を貸してくれることが必ず地域の力となる。そのような背景のもと飛騨市ファンクラブを設立、全国の飛騨市ファンの方々と繋がり、集い、語り飛騨市をさらに楽しんでもらう組織をつくりました。このファンクラブは、設立当初、楽天などと提携し会員に色々な特典を付与しました。その財源は、全てふるさと納税をあてています。そして、会員の獲得と活動の拡大を重ね飛騨市を訪れる人々を拡大していきました。これこそ関係人口の成功例であると感じました。

次に、兵庫県伊丹市長の藤原保幸氏から、「清酒発祥の地・伊丹」についての発表がありました。日本遺産に認定されたのを機に日本酒をメインテーマにしてミュージアムや歴史的な造り酒屋などを整備し、伊丹のにぎわい創出に取り組み、何度も訪れたくなるまちの創出をつくりだしています。又、伊丹出身の芸能人（南野陽子、有村架純、花村惣太）にお願いし、市のブランディングに大きな成果を上げられています。

以上のパネリストからの発表のあと、個性を活かして「選ばれる」まちづくりについて意見交換がなされ、質疑応答の後、大杉氏のまとめがありパネルディスカッションが終了しました。

閉会式（１１：５０）

閉会式は、次期開催市の青森県八戸市の熊谷雄一市長から挨拶があり、公益財団法人後藤・安田記念東京都市研究所理事長の小早川光郎氏から閉会の挨拶があり第８４回全国都市問題会議が終了しました。